

スポーツ選手が遭遇する“負の出来事”が持つ意味

小井土 正亮* 筒井 清次郎**

*清水エスパルス

**保健体育講座

The Meaning of “Negative Event” that Athletes Encounter

Masaaki KOIDO* and Seijiro TSUTSUI**

*SHIMIZU S-Pulse, Shizuoka 424-0901, Japan

**Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

序 論

試練や挫折と呼ばれるような経験を通して、その選手の中で何かしらの変化が起こることは、多くのスポーツ選手自身の語りから読み取ることができる(中田, 1993; 大野, 2001他)。しかし、スポーツ選手の「何が」、「どのように」変わるのかという疑問に対して、正面から取り組み、競技キャリア全体を俯瞰した上で検討した研究は極めて少ない。

Gordon (1989) は、人が変わる、ということは、それまでの自分が象徴的な意味で“死”に、新しい自分が“再生”されることで達成される、とその過程を説明している。この“死と再生”というテーマは、かつての神話、昔話の世界に多く見ることができる。例えば、神話に登場する英雄は、怪物の腹の中に飲み込まれ、その暗闇の中で夜の海の旅をする。その後、腹の中から出てくることで新しい生きかたに到達するのである。その過程をスポーツ選手に当てはめて考えると、ある出来事をきっかけとして、それまでの競技との関わりかたが“死”に、その後、さまざまな内的な活動を通して、より自分らしい競技との関わりかた(“再生”)へと至ることができるといえるだろう。そして、そのきっかけの一つとなるのが“負の出来事”であると考えられる。本研究では「その選手の競技達成や競技継続を阻害し、その選手に情緒的、感情的に動揺が見られる出来事」を“負の出来事”とした。

一度は“死”んだその選手のそれまでの競技との関わりかたが、どのような過程をたどることで“再生”へと至るのか。その過程を明らかにすることは、スポーツ選手が遭遇する“負の出来事”の持つ意味についても理解を深めることになると考えられる。

それらを検討していく方法として、本研究では、自伝を中心とした2次資料を用いた。その理由として、

その選手の競技キャリア全体を俯瞰した資料であること、自分の歩んだ競技キャリアが1つの物語として語られている点が挙げられる。今ある自分から過去を振り返り、自らについて語ることで、ある経験の意味づけもなされていく(やまだ, 2000)と考えると、本人の語りによって構成された自伝は、選手の歩んだ歴史を考察していく上で、非常に有効な資料であるといえるだろう。また、選手自身の語りを重視し、事例を基に考察を深めることで、より現実的な視点で選手をとらえることにつながると考えられる。

目 的

本研究は、競技キャリアの中で遭遇する“負の出来事”をきっかけとして、スポーツ選手が、自身の関わっているスポーツとの関係性をどのように変容させていくのか、その過程を“死と再生”のテーマに沿って説明し、モデル化して提示することを目的とした。また、そうすることでスポーツ選手が遭遇する“負の出来事”が持つ意味も明らかになると考えられる。さらに、スポーツ選手が“死”から“再生”へと至る過程を明らかにすることで、そのキャリアにおける転機、危機ともいえるような状況において選手自身、または指導者がとるべき態度、行動に必要な知見を与えられると考えられる。

方 法

1. 調査対象

競技キャリアを通じて、大きな負傷体験、スランプ、敗戦などの“負の出来事”をきっかけとした“死”からの“再生”を経験していると考えられるスポーツ選手3名を対象とした。3名は以下の通りである。

古賀稔彦選手（柔道）
荒木大輔選手（野球）
原田雅彦選手（スキー・ジャンプ）

2. 調査手続き

上記の3名について自伝、自伝と類似した出版物、彼らの当時に関するインタビュー記事などの2次資料を収集し、本研究の目的に沿ってそれらを詳細に検討していった。

3. 分析内容

収集された資料から、「負の出来事」が起こった周辺で何が生じていたのか、また競技キャリア全体から見たその出来事の意味を読み解いていく。

4. 事例の提示方法

選手が語る内容を「死と再生」のテーマを考慮しながら、それぞれ選手の競技キャリア全体を網羅するようにまとめた。以下の事例中の「 」は対象者の語った内容を示している。

結 果

1. 事例1 古賀稔彦選手（柔道）

古賀稔彦選手（柔道）は1967年、福岡県久留米市に2人兄弟の次男として生まれる。幼少の頃は「非常に病弱な子ども」で「自分の弱さを客観的に知っていた」という。父は元柔道選手で、「曲がったことが嫌いな性格」であり、頑固さ、実直さが特徴であったという。古賀選手は、父について「常に子どもたちのことを真っ先に考えてくれた」と語っている。小学1年生のとき、近所に柔道場があったこと、当時の友達の多くが柔道クラブに通っていたことなどをきっかけに柔道を始める。当時について「自分次第で強くなれる」、「自分の成長を実感できる」ことに魅力を感じ、「柔道が面白くてならなかった」と語っている。中学進学と同時に親元を離れ上京、東京の講堂学舎で柔道に励む。当時を「自分の身を厳しい困難な場所に投じる、そのこと自体が楽しみだった」と語っている。またその頃から、とにかく「負けず嫌い」で、「勝つためにはどうしたらいいのか」を常に考えていたと語る。その頃について「何より大事にしていたのは、安全な試合をするのではなく、挑戦者として相手に挑むことであった」と語る。中学、高校時代は、個人、団体合わせて8度の日本一に輝く。

1986年、高校卒業後、日本体育大学に進学する。大学入学後も「自信が磐石なことに変わりはない」と、「もう柔道が面白くてならない精神状態」であったと語っている。しかし、その年の10月に開催された山梨国体準々決勝、相手に無理な体勢から背負い投げを仕掛けたところ、相手を掴んでいる腕から「ブチッ」と音がした。右肘靭帯損傷の大怪我であった。それまでの競技キャリアにおいて初めての大怪我であり、「初め

て弱気」になったという。柔道を休まざるを得ない時間の中で、「柔道を取られたら俺になが残っているのだろう」、「俺の柔道はもう駄目なのか」と自分と柔道との関係を問い直す作業をしている。「自分が柔道が続けたいのか」、「悔いがないのか」といった「自問自答」を繰り返したと語る。その中で「柔道をやめることは自分の存在価値を失うことと同義」や「自分にとって柔道は生きている理由」だと感じている。その後、自分のしていた背負い投げが「我流」になっており、いつの間にか「力任せの背負い投げ」になっていることに気づき、「柔道の基本」に立ち返ることを決める。それ以来、自分の長所と短所を確認しながら、投げ方のチェックを繰り返し、一つ一つを自分の納得のいく技にしていくことに専念するようになる。その後、このときの怪我を振り返って、「ケガは最大のピンチだが、最大のピンチは最大のチャンスである」と考えられるようになったと語っている。また、怪我を「克服したときに自分の成長が実感できた」とも語っている。

翌1987年、大学2年時には「技には絶対的な自信を持って」世界選手権に出場するが4回戦で敗退する。その後、3位決定戦で勝利し、銅メダルを獲得する。この時は「勝負は時の運で、今回はたまたま私が負けたのだ」と思っていたという。その翌年、大学3年時にはソウルオリンピックに出場する。大会に臨むにあたって「俺の金メダルは確実」と思う半面「得体の知れない恐怖感」、「プレッシャー」を感じていたという。3回戦、対戦相手のソ連のテナーゼ選手の「背負い投げを警戒」した戦術に何もできないままの敗戦であった。負けた時には「頭の中が真っ白」になり、「身体中が脱力感に襲われ」、「ただ頭を抱え込むしかなかった」と語る。世界選手権と比べて、ソウルオリンピックではより強く「挫折感」、「言い知れぬ敗北感」を感じたと語っている。帰国後、オリンピック前後でのマスコミ、周囲の人間の対応の変化から「人間不信」に陥る。さらに「自分が周りにどう見られているのか」を常に気にしてしまい、自分が「雑念の塊」ようになっていたと語っている。まさに「精神状態はボロボロ」であったという。しかし、それまでと変わらず普段通りに接してくれる後輩、試合会場で頭を下げて回っている両親の姿から「自分には応援してくれている人がいる」、「（柔道は）自分のものだけでなく、自分は多くの人に支えられていることに気づかされ、「自分の誇りにかけて」もう一度戦う決心をする。その頃には、当時、優勝候補と騒がれていたことについても「単に自分の立っているポジションを示すものにすぎない」と考えられるようになったという。そして、「自分は自分のやるべきことをやる以外にない」という決意のもと、「勝つために」「試合で生まれるあらゆる状況」を考えて稽古に励むようになっていく。のちに当時を振り返り「あの時（ソウルオリンピック）は負けて当然だっ

たと思う」と語っている。

翌1989, 91年に開催された世界選手権で優勝する。しかし、優勝後も「いつ追い抜かれるかわからない」からと「高い目的意識をもって」さらに向上する気持ちを持ち続けたという。それまでの世界大会では、「スタッフの言いなり」になり、柔道を「やらされて」しまった結果、自分を見失うこともあったが、この2度の世界大会ではそれがなかったという。また、「本気で応援してくれる人の存在を知っていたから、自分が勝負に集中すればいいのだ」、「応援してくれた人たちへの感謝の気持ちによって、プレッシャーをプラスに転化するようになった」と周囲の人間の存在について語っている。

1992年、バルセロナオリンピックに出場。大会前には「オリンピックへ行って金メダルをとることしか考えていません」と語っている。また「(プレッシャーについて)自分への励みだと思っています」と語っている。大会直前の練習で、吉田秀彦選手との稽古中に左膝靭帯損傷、全治3週間という大怪我をする。しかし、大会に臨むに当たって、「無我の境地、自然体」でいられたので「妙に落ち着いて」いたという。そして、負傷した次の瞬間には「俺は優勝できる」という確信を持つことができたという。なぜなら「マイナスを背負った時のほうが雑念が消えてよい」、「マイナスを抱えたことでかえって勝負に集中できる自分に出会えた」からだと言っている。また、「ありのままの自分を受け入れ、己の姿を客観的に見ることができた時、すべての邪念は取り払われた」とも語っている。また「(ソウルオリンピックの時には)周囲からの『頑張れ』の声が自分の中では重荷になっていたが、今は素直に『頑張ります』といえる自分がある」とも語っている。試合に対しては「ごく自然に気持ちが試合に入っていくような」精神状態であったと語る。「自主性を持った練習は嘘をつかない」という「自己過信ではない自己への信頼」がすべてを支えていたという。試合と試合の間に痛み止めの注射を何本も打ちながらも、なんとか決勝戦まで駒を進める。決勝戦の相手はハンガリーのハイトス選手である。そのときの状況を振り返り「この世界には、量の上の私とハイトス選手しか存在しないような錯覚に陥った」と語っている。ハイトス選手に対し、「終始攻めつづける」が、判定までもつれる。判定の結果、古賀選手の勝利、金メダルを獲得する。本人が「すべてが報われ」たと語る「人生最良の時」を迎えることとなる。のちに大会全体を振り返り、「自分を支えてくれているのは、実は見えない世界の力が大きいと痛感している」と語っている。

その後、怪我の療養も含めて1年以上競技から離れる。その当時は「五輪後ぽっかりと空いた心の空洞は、自分でも驚くほど大きかった」と語っている。しかし、少しずつ「何か違うぞ」と感じ始めてもいたという。

「エネルギーのくすぶり」、「生きる喜びがなくなって」いくのを感じていたと語る。この頃「幼い時に柔道に出会い、今日まで柔道を自分の夢、目標として頑張ってきたことを振り返っている。そして、出した結論が「私にとって生きることは、柔道を続けることだ」ということであったと語る。

バルセロナオリンピックから実に2年5ヵ月後の1994年、講道館杯78kg級に出場するも、準決勝敗退という結果に終わる。「もう潮時か」という気持ちと「まだ自分の中には未知の力が…」という気持ちが格闘したという。そこで古賀選手は「確かにオリンピックでの金メダルは、自分の追い求めていた夢であった。しかし、本当にそれがすべてだったのか」と自問自答する。その結果、自分にとって柔道をする目的は「柔の道を通しての人間としてのたゆまない成長にある」ことに気づいたと語っている。その後は、早く「前の自分」に戻すことよりも、「これから新しい自分をつくって」いくことに「発想を切り替え」た。「過去へのこだわり」を捨て「以前の自分に拘泥することはなくなった」ことで、「心はどんどん上昇して」いくのを感じたという。

翌1995年の、全日本体重別選手権では優勝する。同年、日本で開催された世界選手権では、父の体調がかなり思わしくないことから、「父のため」にも「勝つことにこだわった」と語る。結果としてオール一本勝ちを収め、優勝を飾る。その頃について「新しい自分ができる」のを感じつつあったと語っている。

1996年2月、父が悪性リンパ腫のため死去、56歳の若さであった。父について「口には出して言わなかったが」、「最大限の愛情と尊敬と感謝の念」を抱いていたと語る。さらに「大きな愛情を持って私を見守ってくれた父は柔道の師であり、生涯をかけて私の応援者であった」と語っている。その後行われた、アトランタオリンピックの最終予選、全日本選抜体重別選手権では準決勝で敗れも、過去の実績などからアトランタオリンピック代表に選ばれる。しかし、度重なる怪我から、十分な練習ができないまま本大会を迎えることになる。しかし、「これまでの経験を活かし、そのハンデを乗り越えていこうと思っていた」と語っている。本大会では、苦しみながらも勝ち進み、決勝ではフランスのブーラ選手と対戦する。この試合ではブーラ選手が常に逃げの姿勢で戦ったため、何度も反則を取られている。「あまりにも楽な展開」から「緊張の糸が切れ」てしまい、「弱気になって」、逆に連続して反則をとられ、ポイントで並んでしまう。そして、判定の末、敗れ、準優勝となる。表彰式では、「自分の心に負けてしまったことに悔しくて自然と泣けてきた」と語っている。その後、しばらくは「空っぽの状態」であり、「エネルギーが沸いてこない」状態で1年間の休養を宣言する。

その間、自分が競技することから離れ、子どもたちの巡回指導などに携わる中で、心が「次第にリフレッシュされ」という。また「自分のルールを自分自身によって」敷くためにじっくりと自分の将来についても考えたと語る。

その後、年も明け1988年、「機は熟した」とトレーニングを再開し、「まっすぐに前を見つめ、どうすれば一歩でも前進できるかを考えながらトレーニングを重ねて」いくことを目標に、少しずつではあるが、さらに「新しい自分」を築き上げていったという。しかし、1998年、アトランタオリンピックから2年5ヶ月ぶりに臨んだ試合であった講道館杯では、3位に終わり、翌99年の講道館杯でも同様に3位に終わっている。

2000年、全日本選抜体重別選手権に出場するも、準決勝で敗れ、3位となる。「柔道人生のすべてを爆発させるべく全力を出し切った」が、シドニーオリンピックの代表に選ばれることはなかった。その後、これまでの柔道人生に「悔いを残すことなく」、「腹一杯」の状態での引退を決意する。「己と戦い」、「完全燃焼した」柔道人生であったと振り返る。また、いろいろな人に支えられ、ここまで続けてこられたことに幸せを感じ、感謝の念にたえない」とも語っている。現役生活を終えることについては「水が流れるように、ごく自然な気持ちで受け入れることができた」と語っている。現在は、「古賀道場」を設立し、後進の指導、特に子どもたちの指導に力を入れて取り組んでいる。

2. 事例2 荒木大輔選手（野球）

荒木大輔選手（野球）は1964年、東京都調布市に3人兄弟の3男として生まれる。父・和明は工務店を営んでいた。父も昔から野球が好きで、小さい頃はよく草野球をしていたという。そんな父を荒木は「僕にとって父は小さい頃に、キャッチボールを教えてくれた人であり、相手だった」と振り返っている。幼少の頃から、荒木選手のすることに対して両親は惜しまず協力する姿勢を見せている。そういった両親に対し荒木は「感謝」をし、「途中で投げ出すような人間にはなるな」という両親の信念が「僕の心の底に刻まれていた」と語っている。

荒木選手自身は小さい頃から兄の野球をする姿を見たり、父とキャッチボールをしたりする中で自然と野球に接していくことになる。「(兄たちと)一緒にいきたい」と志願し、小学2年のとき、近のリトルリーグ（調布リトルリーグ）で野球を本格的に始める。6年時には日本一、さらに世界一を経験している。そんな当時の弟を評して、健二は「兄弟の中で人間的には大輔がいちばん強く、真っ直ぐだと思う」、「才能はなくても、意志の強さだけはただの人間ではないと思う」と語っている。中学進学後は、調布シニアリーグでプレー、2度の日本一に輝いている。

1980年、早稲田実業高校に進学、野球部に所属する。入学した年の7月、東京都予選でチームのエースの怪我というアクシデントによって、公式戦初先発を果たす。「不安も気負いも何もない」まま東京都予選を投げ抜き、夏の甲子園の出場権を勝ち取る。甲子園では、決勝で横浜高校に敗れるも、準優勝という結果を残し、荒木選手も44回3分の1を無失点に抑えるという好成績であった。その後、4度の甲子園にすべて出場し、通算17試合に登板12勝5敗という成績であった。その当時は「負けるたびにショックはありました。でも、力の限界というか、自分のできる範囲はこのぐらいだとわかっていたような気もします」と語っている。甲子園での活躍、またメディアの影響もあって「大輔フィーバー」が起きる。当時の周囲の熱狂ぶりについて「その後の僕の人生にプラスになったかどうかは分からないが、僕らしい人間らしい表情を奪い、とてつもない重圧となって押し寄せて来た」と語っている。当時から右肘には痛みがあったが「試合になると忘れる程度のもの」だったという。

高校卒業に当たって、自分は「人気だけが先行している」と、この頃の状況を客観的に見ており、「プロに行くより大学で」野球を続けることを考えている。ドラフト会議の結果、ヤクルトが交渉権を獲得する。当時荒木選手は大学に行き、「(人間形成など)いろいろなことを学びたい」という希望を持っていた。しかし、松園ヤクルト球団社長の熱心な誘いを受け、「自分の部屋で一人で静かに考え」たのち、入団を決意する。それは「万が一芽が出なかったとしても、納得するまでヤクルト側は選手生活を保障」という付帯条件をつけての契約であった。ただ、その当時の評論家の荒木評は「人気に目をつけて、球団の経営を最優先に考えた」契約である、「現在使うとみじめな結果に終わる」など、一様にまだプロとしては力不足であることを指摘している。入団会見では「早く一軍に上がって一日も長くプロのピッチャーとして投げたいです」と語っている。

1983年5月19日、対阪神戦で、プロ1年目にして、初先発初勝利という結果を残す。しかし、球団側の「荒木の今後の興行的な面を考えて」の早めの降板もあったことから、本人は「本当の自分の力で挙げたものじゃないから、勝ち星だとは思っていない」（5回、自責点0）と語っている。その年の通算成績は15試合に登板、1勝0敗（防御率5.10）である。

2年目の1984年は、22試合に登板、0勝5敗（防御率7.18）と結果を残すことはできず、自分でも「客寄せパンダ」になっていること、「まわりの人とくらべて自分の力が一番下」であることを痛感させられたという。その年の12月にはファーム落ちを経験したが、「半分よかったと思った」と語っている。ファームでは「1日5、6時間ヘッドが出るくらい」走り、下半身を強化し、

プロとしての体を作り上げていく。ファームでは9試合に登板し、6勝1敗（すべて完投）と結果を残し、「自信をつけ」ることができたという。それらが認められ、翌1985年の7月には1軍に復帰、4試合目の登板で、巨人・江川卓選手に投げ勝ってのプロ入り初完投勝利をもぎ取る。彼自身もこの試合での勝利が「自信となった」と語っている。結局この年は19試合に登板、6勝7敗（防御率4.31 うち完投4）という結果であった。

翌1986年は32試合に登板し、8勝13敗（防御率4.57 うち完投6）、さらに翌1987年は31試合に登板し、10勝9敗（防御率5.07 うち完投5）と少しずつではあるが「勝つ」ことのできる投手へと成長していく。この2年間は開幕投手も務め、「野球が楽しくてしょうがない」時期であり、「みんなから期待されるピッチャーにならなければ」と考え始めた時期でもあった。またこの頃について、「ご飯を食べたり、お風呂に入ったり、眠ったり…、それらの動作と同じくらいボールを投げることが僕の生活の一部」となっていたと語っている。

1988年、シーズン序盤から右肘の違和感には気づいていたが、「なぜそうなったのか理解できなかった」ので、しばらくはプレーを続けている。しかし、肘の状態は一向によくならず、7月6日の登板を最後にファームに落ちる。「握力がだんだんゼロに近くなっていく」状態から、さらに肘から右腕全体が少しずつ「『石』にでもなっていく」ような錯覚を経験している。「神様がもうオレに野球をやめろって言っているのかな」と感じたという。その時、同僚だった土井選手に「もうダメかもしれない」と打ち明けている。球団との話し合いの結果、「すんなり」と手術が決まる。球団側は肘の故障を入団の年には把握しており「いつ手術に踏み切るか」という状態であったが、「表立った痛みがなかった」ためここまで先延ばしにしていたようである。8月、ジョーブ博士に診てもらうためアメリカへ向け出発する。診断の結果、「ムラタ（村田兆治・ロッセ）と同じ」症状、右肘内側靭帯の一部断裂であることが判明する。そして、左腕の腱を右肘へ移植する手術が行われた。帰国後も、わずかな回復を確認しながらのリハビリが続いていく。ある日、小指の痺れがとれないことから、10月末に再渡米し、再びジョーブ博士の診断を受ける。診断の結果、再手術が決定し、今度は右肘腱部の神経に付着していた脂肪を取り除く手術を受ける。その後は「順調」に回復していくことで逆に、「焦るな」というジョーブ博士の忠告を忘れ、リハビリが少しずつオーバーワークになっていく。

翌1989年の6月にはフリーバッティングの投手ができるところまで回復する。しかし、その頃からまた「右肘が腫れ」てきて、「まさか…」という気持ちを抱く。再々渡米が決まったのち、田村トレーナー、土井選手両者の家を訪ね、「今度失敗したら…」と不安を明

かす。その時、両者とも「その時はオレの腱をあげる」と答えたという。そうやって彼らと話をすることで「わずかではあるが、手術に対する不安から解放された」と語るが、「世の中の神という神を恨まずにはいられない心境」でもあったという。9月に3度目のジョーブ博士の診断を受ける。その結果、再々手術が決定する。今度は右腕の腱を右肘に移植するもので、もうこれ以上代わりとなる腱は彼の身体にはなく、「最後のチャンス」といえるものである。その時「最初（の手術のとき）とは比べものにならない」ほどの不安に襲われたと語っている。野球をとったらただの「デクノボー」と化すであろう自分を「みじめで情けない」と感じている。その頃について「俺が野球をしていなくても、日本ではプロ野球の試合が毎日行われている。地球だって回り続けている」、「人間とは、自分とは、いかにちっぽけな生き物であるか。そう思うと焦っても仕方ないことがよくわかった」と語っている。この時、田村トレーナーからの「ガンバレ大輔」という励ましの手紙を受け取る。「…可能性がゼロではない限り、目標を追い求めるべきだと思う。大輔は自分のために神宮のマウンドに立つのではなく、大輔を応援してくれる全国のファンのために、再びマウンドに立たなきゃいけないんだ。もう一回、大変だけどガンバレよ。俺は何も出来ないかもしれないけど、出来るかぎり力になるよ。だから、前向きに、気持ちだけは落ち込まないで欲しいんだ…」という内容に涙したという。「遠く離れた日本で、父や母以外にもまだ僕を思ってくれている人がいた。そう考えると今ここで投げ出しちゃイケナイ」と感じたという。また帰国後、田村トレーナーの家に泊まりこみ、生活を共にし、「本当に甘えさせてもらった」と語る。のちに「信頼できる人の支えが自分を救ってくれた」と語っている。

1990年は「リハビリに専念」した生活を送る。この時期、「夜が来るのが怖かった。朝起きると僕が野球の選手でなくなってしまうように思えた」と、その不安感を語っている。ある日、『あの人は今』というテレビ番組の取材を受ける中で「もうオレは甲子園のマウンドに立った荒木大輔じゃないんだな」と実感する。そんな中、家のテレビで父・和明が、かつて荒木が活躍した甲子園のビデオを隠れて見ているのを見つけてしまう。その時、「一日も早く父に、もう一度投げている姿を見てもらおう。それまでは死んでも野球はやめない」と決意する。当時について、「あせりがなかったとはいえません。でも、それを見せないようにしていました。野球をやめようと思えないこともなかった」と語っている。しかし、「スピードがなくなって、打たれて野球をやめるなら諦めもつくだろうが、故障でこのまま選手生命にピリオドを打つだけは、どうしても許せなかった」とも語っている。

1991年、1回目の手術からすでに2年半が経過して

いる。ブルペンでのピッチング、全力投球もできるようになった矢先、6月に今度は椎間板ヘルニアで「まったく動けなくなり」、全治2ヶ月の診断を受ける。寝たきりの生活の中で「もしかしたら2度と野球はできないかもしれない」、「神様は何度、試練を与えれば気がすむのだろうか」と感じていた。その年の契約更改では、年俸30%減と提示され、球団からの「最後通告」も受ける。

1992年、3月に父・和明が倒れ、膀胱がんの手術を受ける。そして、8月19日父・和明他界、61歳であった。荒木は「胸にぽっかりと穴があく」のを感じ、父の存在は、それほど「大きな心の支えだった」と語っている。父の死から46日目、9月24日の対広島戦、ひさびさに1軍のベンチに座ることとなる。そして、7回2アウトランナー1塁の場面で、1541日ぶりのマウンドに立った。マウンドに登ったときには、「親父、帰って来たよ」と心の中でつぶやいたという。わずか6球ながら打者1人をきっちり抑える。試合後には「これしきで泣くわけにはいかない。まだまだオレにはやらなければならないこと、たくさんあるんだから…」と語っていたという。そして、10月3日の対阪神戦、4年前の5月6日（荒木選手の誕生日）以来、1611日ぶりの白星を先発7回無失点で飾る。投げながら「野球ってこんなに面白いもんだったんだ」と感じた、と語っているように、「野球を始めた頃の気持ちのままで」、「投げられることが楽しくて嬉しくて仕方なかった」という。ただ「この姿を父親に見せられなかったことは、残念でならない」と語っている。ただ単に投げるだけでなく、「きれいなマウンド（先発投手）」にこだわってきて、そして「今、プロ選手になって、本当に良かったと初めて思え」たと語っている。

10月10日、優勝争いが大詰めを迎え、荒木選手が「因縁を感じずにはいられない」と語る「甲子園」で、阪神との直接対決に先発することになる。結局5回を1失点で「自分の役目を終えて」降板する。その後、チームも勝利し、14年ぶりのリーグ優勝を勝ち取る。その夜、インタビューに答え、「怪我しているときには神様の存在なんか考えもしませんでした。家族の誰も信心していません。でも、甲子園での5度の体験といい、プロで開幕投手をやれたことといい、監督と父の死があった後復帰したと思ったら、ヤクルトに優勝がかかっていて、最後の試合で先発させてもらって、しかも勝てました。…だからボクの人生って神様というか、なんというか自分の力のおよばない存在みたいなものに導かれているんじゃないか、としみじみ考えていました」と語っている。また「自暴自棄になったことはありません。プロ入りして9年目になりますが、最初の5年間は球団の寮にいましたし、故障して出番のなかった時間は家にいましたから。好きな親がいました。兄たちがいました。野球のことも、励ましの言

葉も何一つ言わずに、当たり前のようにふるまって自分自身を生きている両親の姿を見ていましたから、とにかくマウンドで投げたいという気持ちばかりでした。それもただ単に投げるのではなく、きれいなマウンドに立ちたかったんです」と語っている。

その後、シーズン全体を振り返り、まず故障による長期離脱について、「遠回りしたおかげでそれまで見えなかった自分が、客観的に見えるようになったと思う」と語っている。そして「野球を続けることの楽しさ」を改めて知り、「投げられるチャンスがあるだけで（幸せなこと）」と語っている。また、これまでの競技生活を振り返り、「『荒木フィーバー』に振り回され、自分を見失ってきた長い辛い経験の中で、自分の本来の姿を発見」できたと言語。そして、「僕は僕、荒木大輔は荒木大輔」だから、「（他の投手のことも）素直にすごいと思える」と語っている。これからの野球生活については「過去はிரらないし、振り返ることはない」とした上で「今を見つめ、今を投げ、今に生きたい」と語っている。

その後、93年、94年と1軍で活躍するも95年は1軍での登板はなく、2軍での生活となる。翌1996年には、横浜ベイスターズに移籍するも5試合に登板、0勝2敗（防御率7.86）という結果であった。このシーズンを最後に引退を決める。引退に際して「自分自身をもう一度試したかったけど、通用しないのがわかった。僕は、バッターに向かう怖さが出たら、もう終わりだと思っていたんですけど、実際、このままでは1軍では打たれてしまうという気持ちが強くなってきたので、引退を決めたんです」と語っている。また「将来は指導者になりたい」と語る中で「そう思ったのは、怪我したあたりからですね」と語っている。最後に、これまでの競技生活を振り返って「復活後の約2年が僕のプロ野球人生の中で最も充実した時間だった」と語っている。

アメリカへコーチ留学をするなどを経て、現在は、ヤクルトスワローズの投手コーチである。

3. 事例3 原田雅彦選手（スキー・ジャンプ）

原田雅彦選手（スキー・ジャンプ）は、1968年北海道上川町に生まれる。父親は土建業を営み、無口で「ほとんどしゃべらない」人であったという。母は「いつも頭ばかり下げている人」で、原田選手自身は自分の性格は母親似であると感じている。

小学3年生の夏、地元の指導者に誘われてジャンプ競技を始める。当時は「飛ぶことが好きだったというより単にそれが一番の遊びごとだった」と語る。もともとジャンプ力もあり、高く跳ぶことをほめられ、それが「やみつき」になったという。それが原田選手特有の「高く跳び上がる」踏み切りの基礎をつくったと語る。中学1年時の全国中学ジャンプ選手権優勝、翌

年2連覇と「40年ぶりの快挙」を果たし、早くからその才能は開花する。中学3年時から高校2年時までは世界ジュニア選手権に出場し、中3・33位、高1・22位、高2・15位と少しずつではありながら、しかし確実に成長を遂げていく。この頃から「スタートの前に物怖じしたり、ビビったりしたことは一度もない」と語っている。高校3年時にはワールドカップに初参戦している。

1987年、高校卒業後、地元の雪印に就職し、スキー部に所属する。

1989年、当時スキー板をパラレルに揃えるジャンプが主流の中、ボーグレム選手（フィンランド）が、その先端をV字型に広げるジャンプを取り入れ、ワールドカップ年間総合チャンピオンに輝く。この出来事は世界の他のジャンパーと同様、原田選手にとっても「衝撃的」であったという。ちょうど原田選手は翌1990年の世界選手権でも活躍することはできず（ノーマルヒル15位、ラージヒル17位）、「はがゆい思い」をしていた。そこで「もうフォームへのこだわりは捨てて」V字ジャンプへの移行を決める。

1992年、V字ジャンプを取り入れた原田選手は、アルペールビルオリムピックに参加する。結果はノーマルヒル14位、団体戦4位、そしてラージヒルでも4位（日本史上最高位）と活躍する。翌1993年には、スウェーデンでの世界選手権でノーマルヒル優勝を果たす（21年ぶりの快挙）。その頃は「俺はここの勝負には強いんだ。一か八かの勝負なったら負けない。大舞台では必ずホームランが打てる、俺はそういう選手なんだ」と「天狗の親分」のような状態で、「根拠のない自信」だけは持っていたという。今振り返ると「何もかもがうまくいっていただけの結果」であったと語る。「自分のジャンプの必要な課題」には気がついていいるが、「スーパージャンプを出すことだけ」にこだわりがあったと語っている。その年の10月には妻・恵子と入籍する。

1994年、リレハンメルオリムピックのラージヒルでは1本目で4位につけるも、2本目に失敗、13位に終わる。続く団体戦では1本目を終えた時点で日本は、1位ドイツと僅差の2位であった。2本目では原田選手の前に飛んだ日本の3選手が大きく距離を伸ばし、2位となったドイツと55.2ポイント（距離にして約105m飛べばよい）の大差をつけて最終ジャンパー原田選手の順番を迎えた。「俺もホームランを打ち」、「かっこよくガッツポーズを決め」ようと臨んだジャンプではあったが、結果は「飛び出した瞬間、駄目だと思った」という「失敗ジャンプ」で、飛距離は97.5mであった。その結果、2位だったドイツに逆転され、銀メダルに終わる。その時「頭の中は真っ白」、「何も考えられない」状態になり、「ただ頭を抱え込むしかなかった」状態だったと語る。他の3選手からは「銀メダルだよ、凄

いじゃない」、「まだ次があるよ」と声をかけられ、「他の誰でもなく、一緒に戦った彼らの言葉だったから、何とか救われた」という。その後のノーマルヒルは55位と惨敗し、今大会を「技術的、人間的未熟さのせいで失敗」と振り返る。ただ「いつものようにジャンプして、いつものように失敗しただけ」だとも語っている。その年の4月に結婚式、5月に妊娠が判明する。

その後の大会ではリレハンメルでの失敗を打ち消したくて「早く結果を出したい」という気持ちが強かったという。その結果「足元を見つめること」を忘れていたと語っている。

翌1995年、その年のワールドカップでは、船木和喜選手が初出場初優勝を果たす。この出来事がきっかけとなって、「今までのジャンプを捨てて、思い切ったことにチャレンジしなきゃいかん」と「薄々感じていたものが確信へと変わっ」たと語っている。それまでの原田選手の飛び方は、「サツの一瞬のタイミングをつかみ、高く、上方へ蹴り上げるような踏み切り」であった。しかし、当時結果を出していた船木、葛西紀明選手らが行っていた「低い飛び出し」の練習に取り組み始める。それは、それまでのやり方からは180度異なるやり方であり、なかなか自分になじませることができず「スランプ」を招くこととなる。トレーニングに取り組む中ではコーチに対して「俺を船木にさせるつもりか」と食って掛かったこともあるという。原田選手も当時を振り返って「低い飛び出しを試みて、結果的にはバラバラになってしまったけど…1度はやってみないことには…本当の結論というのは、多分出せなかったと思いますね。あの一年があるから今があるんだと思います」と語っている。

ちょうどその頃、妻・恵子との何気ない会話の中で、恵子が発した「マーちゃんはさ、あなたはあなたなんだから、パパはパパなんだからさ、あんたらしくやればいいんじゃないのかなあ…」という言葉が「自分を見つめ直すこと」のきっかけとなったと語っている。そして「おまえは原田雅彦なんだから、原田らしく飛べばいいんだ。原田らしいジャンプが一番力を出せるんだ」と気づいたことが「とてつもなく大きな立ち直りのきっかけになった」と語っている。それは「僕は船木にはなれないし、船木に俺のジャンプを真似しろといっても無理なこと」であると気づくことでもあった。

1995年のオフシーズンは「自分らしさ」を徹底的に追求する時間であったと語る。所属しているチームの若手と一緒にトレーニングをする中で、「自分が飛べると思うスタイルが一番いい」、「原田の世界、原田らしいジャンプ」を確立することが重要であると認識する。「船木選手の真似」ではない、自分の脚力を生かしたジャンプを志向していく中で、「丸いジャンプ（体を少

し前に湾曲させることで風の浮力をつかまえやすくなった状態)」に行き着く。「丸いジャンプ」について、原田選手は「原田らしい世界があって、はじめて原田らしい丸いジャンプができるんじゃないか」と語っている。また、「ジャンプを広い視野で見られる」ようになったことで、「サツのタイミングの幅」も「点から線へ」広がっていくように感じられたと語っている。そして「いつしか知らない間にジャンプをひとつの世界というふうにとらえている自分を発見」したという。

その年のワールドカップでは、3戦目にして自身初の優勝、総合でもこれまでの最高位である5位に入る。この年を振り返り、「今年のジャンプは去年のどん底があったから」できたと語っている。

1996年は「自分のジャンプが非常にいいものになってきているから、飛ぶことが楽しい」というほど夏から秋にかけては「調子がいい」状態であった。それは「スタイルがどうの、飛び出しがどうで、高さがどうで、というのではなく、1mでも遠くに飛ぶんだという気持ちが大切」であることに気づくことができたからであるという。しかし、冬に入り、何となく「調子が上がらない」、「流れにのれない」状況が続いていた。徐々にではあるが再び調子を上げてきた中、行われたワールドカップのドイツ大会では、着地時に転倒して肋骨にひびが入る怪我をしてしまう。その出来事について「ジャンプの神様がまだ調子を上げるんじゃないと言っている」と感じたと言っている。翌1997年1月に長野で開催されたプレオリンピックで結果を残し(3位)、トロンハイム世界選手権へ出場が決まる。

そして2月に行われた本大会では、ラージヒルで「(1本目にいいジャンプをして1位につけた後も)いつも通りだ。原田は原田らしく飛べば、それでいい」と考えていたと語る。そして、今大会で日本人史上初の世界選手権ラージヒル優勝を勝ち取る。記者会見では「波乱万丈の競技生活だから楽しい」と語り、またその後のインタビューでも「4年前の世界選手権での金メダル(ファルン・ノーマルヒル)とスランプの両方を経験してきたことが今回の金メダルの原因だと思う」と語っている。

翌年に長野オリンピックを控え、原田選手は「長野オリンピックをもって引退」することを「漠然とながら」考え始めたという。しかし、自身の競技生活を振り返る中で「ジャンプを通して、こんなにもたくさんの財産をいただいていた。こんなにもいろんなことを学んできた」ことへ感謝し、そして「自分が本当にジャンプに魅せられている」ことに気づいたという。だからこそ「ボロボロになるまで飛び続け」ることを決意する。また、この頃リレハンメルオリンピックでの失敗ジャンプに触れ、「あの失敗から得るものを得て、いまこうやっている。やはりショックだったし、それから自分というものを取り返し、立て直すまでには相当

の時間がかかった」と語っている。さらに「自分自身を見直し成長することができた」出来事ではあったが、「リレハンメルから長野までの4年間、口に出しては言わなかったけど、何とかあの失敗をキャラにしたいと思って競技を続けてきた。本当にそうだった」とも語っている。

1998年に開催された長野オリンピック、最初に行われたノーマルヒルでは1本目でトップに立つも2本目では距離を伸ばせず、結局5位に終わる。この時「納得のいくジャンプだったけど、目に見えない力みがあったのかもしれない」と語っている。続くラージヒルでは1本目で「失敗」するも、2本目に大ジャンプを決め、自身としては初のオリンピックでのメダル、銅メダルを獲得する。

そして、迎えた団体戦では、悪天候により「試合自体もうキャンセルぎりぎりの状況」の中、1本目に79.5mの「失敗ジャンプ」をする。周囲の関係者も「しかたない、誰が飛んでも…」とその時の状況を語っている。原田はその時「またか、またか…」と感じていたという。「どうして自分だけ…」、「自分の時だけトラブルが起きてるんじゃないか」とも考えていたという。「(リレハンメルでの辛さを)これから先も背負って生きなければならないのか…」と「この時ばかりはどうにも混乱して收拾がつかない」状況だったという。さらに、全チームの1本目のジャンプを終えた後の、荒天による30分の中断時には「20年間の競技生活の中で、初めてパニックに襲われそうだった」という。その短い時間の中で原田選手は「原田らしさを何より体が知っていた」というように、ワックスルームの中で静かに助走時のクラウチングスタイルをとることで「心が水を打ったように静まり返っていく」感じをつかんでいる。そして「オリンピックの大舞台に立とうとしているこの瞬間も、俺は原田雅彦としてここに存在している。それ以上でも以下でもないんだ」と感じていたという。そして、2本目のジャンプ、スタートゲートに入った時には「このオリンピックの中で、いや、ボクの競技人生の中で、今がいちばん冷静になれているかもしれない」と感じるほどであったという。結局137mを飛び、その日岡部選手が1本目に記録したのと同じ、白馬ジャンプ台の最長不倒距離を記録した。最後は船木選手が120mを飛び、日本チームの金メダル獲得が決まった。セレモニーも終わり、「またやったのかって、本当に辛かったんだよ……。僕だけでやったんじゃないよ、4人で力をあわせて……。金メダル獲ったんだ……。」と言葉ともならない言葉を残している。長野オリンピックでは「人間として感動すること」を学び、「俺の涙はこんなにも濃かった」ことを知ったと語っている。

長野オリンピック後に「今回は金メダルを獲れたけど、リレハンメルのメンバーだった葛西や西方のこと

を考えると、今でも悔いは消えません…ただ、実際には、嬉しくて、嬉しくてという気持ちのほうが大きいですよ」と語っている。また「あの失敗がなければ今の原田雅彦がなかった」と前置きをしながらも、「リレハンメルでの失敗を忘れようといっても無理な話だし、ひとつの経験として忘れてはいけないことなんです。必ず何かの機会にはステップになるものですから」とも語っている。

これまでの競技キャリアを振り返って、「僕のスキー人生というの、さまざまなものを積んで、積んで、積んでいいものになるんじゃないかと思えます。その意味ではまだ、積み重ねている途中です」と語っている。ジャンプを続けることについて「やっぱり自分が満足したい」からであり、「これから求めていくのは、本当に強いジャンパーになること」とであると語っている。そのためには「多少のジャンプの改良も必要」としながらも、「基本的なものは変えませんが。原田らしく、高く、遠くにというジャンプは」と語っている。

考 察

古賀選手の競技キャリア全体を概観してみると“負の出来事”が3度起きていたと考えられる。1つ目は、大学1年時の山梨国体での右肘の負傷である。その後の自問自答によって「柔道は生きている理由」と語るように、自分にとっての柔道の位置づけが明確になっている。2つ目は、ソウルオリンピックでの敗戦である。その時は「頭の中が真っ白」、「頭を抱え込むしかなかった」といった状態であり、まさに内的な“死”を経験したといえるだろう。この出来事は十分な稽古による外的な自信とは裏腹に、内側の準備はまだなされていなかったことを気づかせている。3つ目は、1994年の講道館杯での敗戦である。この時は競技からの離脱、引退という“死”を感じた経験から、深い自問自答へとつながっていく。古賀選手は、“負の出来事”を経験するたびに、今の自分自身を受け入れ、自分が柔道を超える意味を明確にしている。それによって、動機づけも高まっていることがうかがえる。

荒木選手は肘の故障による手術、リハビリ生活全体を“負の出来事”とした。荒木選手は長いリハビリ生活の中で、一時は「テクノボー」になってしまう不安感を持ちながらも「荒木大輔は荒木大輔」と、自分自身を受け入れることができるようになる。その過程では田村トレーナーや家族の支えが欠かすことができなかったといえる。

原田選手は、リレハンメルオリンピック、長野オリンピックで2度の“負の出来事”を経験していた。リレハンメルオリンピック後には、自分らしさを模索する作業をするが、結局、「原田らしい」ジャンプの確立

へと至る。長野オリンピックでは「パニック」に襲われそうになるほどの内的な“死”を経験するが、それまでの競技生活で培ってきた経験から「原田雅彦としてここに存在している」と、今いる自分自身を受け入れることができるようになる。

3選手の“負の出来事”の経験に共通している点は、その出来事を経験した後、自分の内側、自分を取り巻く外側の環境の、それまで気づくことができなかった部分に気づき、自分なりの競技観を明確にしている点である。まさに「個性化のプロセス」(Jung, 1975)をたどったといえるだろう。

以下では、本研究から導かれたスポーツ選手の“死と再生”の過程について総合的に考察していく。まず“出来事が起こる背景(必然性)”についてである。3選手の事例から、スポーツキャリアで遭遇したそれぞれの出来事が、その時、その選手に起こるべくして起きた出来事であると考えられた。これはその選手の競技キャリア全体を俯瞰して検討することで導かれたものである。

次に“負の出来事”の後に経験される“それまでの競技との関係性の崩壊”、“動機づけの揺らぎ”についてである。3選手とも“負の出来事”をきっかけとして、それまでの競技との関わりを見直さざるを得なくなったり、動機づけが著しく低下したりするといった経験をしている。まさに象徴的な“死”の経験であるといえるだろう。

その後、選手は“自己受容”、“気づき”の段階へと移行していく。つまり、象徴的な“死”を経験した選手が“再生”へと至る過程では、ありのままの自分、今いる自分をそのまま受け入れる“自己受容”、そして、それまで気づくことができなかったことに対する外的、内的な“気づき”が必要になると考えられる。また、3選手に共通した特徴として、「神」、「自分の力のおよばない存在」といったものに導かれているようだと語る点が挙げられる。こういった点からも広い意味での“自己受容”がなされたことが理解できる。

次に“自己受容”、“気づき”へと至るためには“内的準備”、“内的作業”、“外的関わり”の3つの要因が関係していることが導かれた。

まず“内的準備”とは、その選手の家族やそれまでの指導者の影響、そのスポーツに対するコミットメントの程度といった“スポーツキャリア”、また、その選手がその出来事を受け止めるだけの精神的な成熟の程度である“レディネス”の2つのことである。“内的準備”がどのようなものかによって、その出来事に対する意味づけやその後の対処が変化するといえるだろう。

次に、“内的作業”とは、自分とスポーツとの関係性について改めて自分自身に問い直す“自問自答”、過去にどのような経験をし、何を学んできたのかについて

の“振り返り作業”の2つのことである。“内的作業”を通して、「自分らしさ」を模索しているといえる。

最後に“外的関わり”とは、家族、指導者、友人、ファンなどの“ソーシャルサポート”のことである。3選手の周りの人たちは、選手が“死”を乗り越えようとする作業を、見守り、支える立場として存在している。また、“内的作業”と“外的関わり”は、その選手が“自己受容”、“気づき”に至るための必要な要因であると同時に、“自己受容”、“気づき”がなされた選手は“内的作業”、“外的関わり”の中身も変化するという相互作用的な性質を持つものであると考えられる。

“自己受容”、“気づき”に至った選手は“自分らしい競技との関係性の確立”へと移行する。それは、競技キャリアにおける象徴的な“死”から“再生”へと至ったといえるだろう。その後は、“自分らしい競技との関わりかた”をしていくことになる。それは、現役選手としてだけではなく、指導者としての競技との関わりかたもその1つである。

謝 辞

本研究を計画するにあたり、丁寧なご指導とご助言を賜りました中込 四郎先生（筑波大学人間総合科学研究科）に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 荒木大輔 1993 復活のマウンドに命をかけて 学習研究所
岩田暁美 1993 荒木大輔 「美貌の遍歴」 Sport Graphics Number, 324, 72-76。
Gordon, R. 氏原寛（訳）1989 死と創造 ユング心理学選書 15 創元社

- 後藤正治 2002 挑む老雄—原田雅彦 Sport Graphics Number, 542, 66-70。
Jung, C. G. 河合隼雄（監訳）1975 人間と象徴：無意識の世界 河出書房新社
木村幸治 1993 初球はストレート 荒木大輔物語 潮出版
古賀稔彦 2000 人は弱さを知り強くなる winning spirit PHP 研究所
古賀稔彦 2001 古賀稔彦 世界を取った男、その生き方 東京学参
中込四郎 1993 危機と人格形成 —スポーツ競技者の同一性形成— 道和書院 Pp. 1-42。
中込四郎 1998 人格変容要因としての危機 筑波大学体育科学系紀要, 11, 341-352。
中田久美 1993 夢を信じて Believe in Dreams 日本文化出版
根岸康雄 1998 パパ、やったよ／原田雅彦・恵子夫妻「ふたりの自叙伝」 講談社
大野豊 2001 全力投球 我が選んだ道に悔いはなし 宝島文庫
大友信彦 1992 古賀稔彦、吉田秀彦 大いなる証 Sport Graphics Number, 298, 52-54。
折山淑美 1998 誰よりも遠くへ 原田雅彦と男達の熱き闘い 集英社
Stambulova, N. B. 2000 Athlete's crises: A development perspective *International Journal of Sport Psychology*, 31, 584-601.
鈴木 洋 史 1986 Reborn Daisuke! Sport Graphics Number, 139, 22-23。
やまだようこ 2000 喪失と生成のライフストーリー —F1 ヒーローの死とファンの人生— やまだようこ（編著）人生を物語る —生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房 Pp. 77-108
山崎浩子 1999 Starting Over「それから」59 荒木大輔 Sport Graphics Number, 469, 93。

（2010年9月13日受理）